

親鸞の伝道

高山秀嗣

親鸞の生涯全体を論じていこうとした場合、それを行うためには東国における彼の伝道活動の内容を明らかにしていくということが重要な意味をもってくるように思われる。本研究は親鸞の東国伝道が、親鸞の思想的生涯においていかなる意味をもっていたかということについて、いくつかの史料をあげつつ検討していこうとするものであり、今回の発表はその出発点をなすものとしてある。

さて親鸞が伝道を行う根底には、「自信教人信」という自分の信じた教えを広めていこうとする立場があつた。親鸞はその立場に立脚したうえで、教化の実践活動を行つていった。親鸞自身は、法然の弟子であるとの姿勢を生涯貫いていて、あくまで法然の正しい教えを広めようとした。そのために、越後から東国へと移住する必要があつた。そして、東国における伝道がそのような意識と姿勢から行われたが故に、自然と人心を掴んでいったことが考えられる。

ところが親鸞自身は、東国でどのような伝道活動を行つて

いたかをほとんど具体的に述べてはいない。そのため周囲の人達の残した記録から、親鸞の伝道活動がどのようなにみられていたかを探つていかなばならない。まずそのために『恵信尼消息』に描かれた、教化者としての親鸞の態度を窺つていこう。この『恵信尼消息・三』においては、親鸞の衆生利益観の変化が物語られる。この記事は、親鸞が四二歳の時に越後から常陸に移住する途中、佐貫において飢饉や疫病に苦しむ人達を見兼ねて、衆生を利益するために『三部経』を千部読誦しようとして、「名號の外にはなにごとの不足」があるだろうかと思ひ返して止めたとするものである。ただしこの意識は親鸞の中で、一七年後の五九歳の時点においてもまだ完全に払拭されてはいない。この消息からは、そのようなものであつたのではないかと想像される、親鸞の伝道に関する迷いの思いやそのすがたが私達に伝わってくる。このように親鸞の衆生利益観は、自らの力によつて衆生を救済せねばならないのであるという使命感から、他力の教えの正しさの確

信へと次第に変化を遂げていることが知られる。

親鸞が東国で、何か特別の方法や独自のやり方を用いて伝道活動を行っていたとは考えにくい。親鸞には法然の弟子であるとの意識があり、それが東国の伝道においても根底にあった。その様子は、『御伝鈔』に示されているように「幽棲を占といへども、道俗あとをたづね、蓬戸を閉づといへども、貴賤ちまたにあふる。佛法弘通の本懐ここに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す」や、『報恩講私記』に書かれた「茲祖師為弘西土之教文、遙跋東關之斗藪。暫逗留常州筑波山北邊、對貴賤上下示末世相應之要法」というものであったと考えられる。つまり、親鸞自身が積極的に伝道を行おうとしなくとも、教えは自然と広まってくいった状況であったと考えられる。それは、親鸞が既に多少はみられた念佛の教えの広まりを基にして、自分の草庵を訪れてくる人々に対して、対話的な伝道を行っていたことによるものである。また時々には教えを説くという目的で、東国各地を歩いて回ることもあったであろう。そしてその教えが広まってくという事実は、親鸞に法然の教えの正しさを確信させることともなった。また当時から、東国において道場という存在はあり、そこでは親鸞が中心となって法然の命日である毎月二五日には集まりがもたれ、念佛会が催されており、その場においても教えが説かれ、人々に念佛の縁を結ばせる機会

となっていた（『御消息集・八』）。そして、当時の東国の修験道的な立場の宗教者にも、親鸞の教えの正しさは次第に受け入れられていった（『御伝鈔・下―三』）。

親鸞が教えを説いた念佛集団の中においては、阿弥陀佛の前では一切衆生は平等であるから、身分的な差別は全くないとされ、そのことは親鸞が門弟に対して、自分から御同朋・御同行と表現していることによって知られる。また親鸞の門弟についての記録である『親鸞聖人門侶交名牒』の、東国の門弟の人数が他の地域と比べて格段に多いことから、親鸞の伝道が東国中心であったことが知られよう。

東国という地域は、親鸞が越後流罪以降、農民に交じって生活することによって、彼自身の思想の深まりがあったであろうとの予測が可能であることから、その点において意味をもっているといえる。それまで京都という地において、自分が僧侶であるとの意識から離れることが現実には不可能であった親鸞にとって、流罪によって自分が置かれた環境の変化は戸惑うことばかりであったに違いない。貴族文化が中心であった京都と、鎌倉武士の住む東国との間には、いくつもの点で大きな違いがあった。京都では自分の志を十分に果たせなかった親鸞にとって、東国という新進地域は大変魅力的であった。当時の東国は、かなり文化程度は高いものであったと考えられる。主著『教行信証』も、東国においてその原

型は形作られたであろうし、東国が親鸞にとつてはそれまでにないかたちでの新しい脱皮の場所となつていった。そのことは親鸞が法然とは異なつて、東国を体験的に知つていたことからもいえる。そしてそれは、日々の東国民衆との交流の中でのみ成就していくことができた。そして、「弟子一人ももたずさふらふ」という親鸞において一貫している考え方も、東国の生活の中から生み出されたものであつたと考えられる。このように身分的な差は全く問わないとする親鸞の教えは、当時の社会状況とも関連して、多くの民衆を惹付けていった。

六〇歳すぎに帰洛して以降の親鸞は著述活動に終始し、一見伝道活動らしきことは行っていないようである。しかし、「このふみをもてひとびとにもみせまいらせさせたまふべく候」というような文章が、親鸞の消息中に度々みえていることや、明らかに個人ではなく門弟の集団に対して出された消息も残っている。この表現については、自分の消息が東国の念佛集団における疑義への応答であることを念頭においたうえで、用いられていたと考えられる。そして、時折東国から上洛してくる門弟の質問に答えるという活動も行っている。これらのことから、東国での伝道活動が帰洛後の親鸞にとつても大きな意味をもっており、そこには連関性を感じられる。また、『唯信鈔文意』・『一念多念文意』にも「ゐなか

のひとびとの・・・やすくころえさせむ」とあり、親鸞の意識がそのような人々をも含むものであつたことは指摘できよう。この他、親鸞が語つた言葉の記録である『歎異鈔』製作の背景には、親鸞帰洛以降に東国において起こつてきた異義があつたことも考えられる。また東国伝道は親鸞に、一般の人々にもわかりやすいようにとの配慮から和語聖教の著作が多いことや、多様な『和讃』が作成された理由の一つにもなっていると考えられる。

以上のように親鸞の東国伝道をみてきたが、これらの伝道活動が親鸞の生涯全体にとつても様々な意味をもっていることは疑い得ない。そして別の角度から、親鸞の東国伝道についてはみていく必要がある。今回の発表では多少あいまいな問題提起に止まつてしまつた感もあるが、今後さらに考察を深めていきたいと思つてゐる。

〈キーワード〉 親鸞、伝道、東国

(龍谷大学大学院)